

第5回陽だまり～touch A LIFE～(H29.10.24)ふいかえい

【地域での支え合いの仕組みづくりについて】

今回は陽だまり～touch A LIFE～（協議体）が立ち上がった背景（＝生活支援体制整備事業）について勉強しました。メンバーのみなさんから寄せられた感想の一部を紹介します。



「2025年問題」は団塊の世代（昭和22～24年生まれ）の人が後期高齢者になると心配されているけれど、今のところは困っていない。だから、どんなことに困るのがわからない。アンケートをとってみては？



校区単位では状況に差があるので、行政区単位で考える必要がある。公民館を活用できないか？公民館をガラス張りの建物に改修して、何があるのか外からわかるように。公民館主事を配置し、いつでも誰でも気軽に入出入りできる場所に。楽しくないと人は集まらない。まずはモデルケースをつくってみては？



「地方創生」の視点からみると、子どもをメインに考える。若い人たちに残ってもらったり、来てもらったりして出生率をあげていくことが求められている。地域包括ケアシステムは2025年を目途に体制づくりをしていくことが必要だけど、それよりももっと先、2050年頃はどうなっているか・・・今の若い世代から“つながり”をつくっていくことが必要とされているように感じる。



地域の中でのつながりが大事。回覧板が回らないということで、一人暮らし高齢者宅を訪問したところ、自宅内に倒れているのを発見。隣組に加入されていたため、すぐに発見ができたが、高齢になり、役をするのが難しいとの理由で隣組を抜けるもいる。また、新しく入ってきた人たちは隣組に加入していない。困りごとが出てくるのでは？



「生活支援体制整備事業」は介護保険制度における事業の一つですが、対象は高齢者に限られていません。子どもから高齢者まで、障がいがあってもなくても、誰もが安心して住み続けられる町を目指して、住民の皆さんの目線で「町にあったらいいな」という仕組みをつくっていくことが重要です。そのために、今後、陽だまり～touch A LIFE～がどんな体制で動いていくのか、どんな体制が動きやすいのかを考えていく必要があるようです。次回、是非、みなさんの考えをお聞かせください。

